

もっと知りたい

武者小路実篤

読んでみよう!

作者も泣いた恋愛小説

『愛と死』

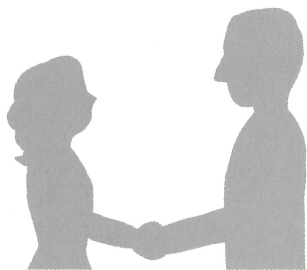
人生は、人間の力では
どうにもできないこともある・・・

■ストーリー

主人公村岡と、親友・野々村の妹・夏子は、将来を誓い合う仲。周囲にも認められて、幸せな結婚になるはずでした。

村岡がパリに旅行した約半年間、2人は手紙を出し合い、帰国までの日数分の○印を一つずつ消してカウントダウンしながら、再会を心待ちにしていました。

もうあと少しで日本に着こうという船中で、村岡は電報を受け取ります。「ご無事お帰りを待っています、夏子」そんな内容だろうと信じて、疑わなかったのですが…



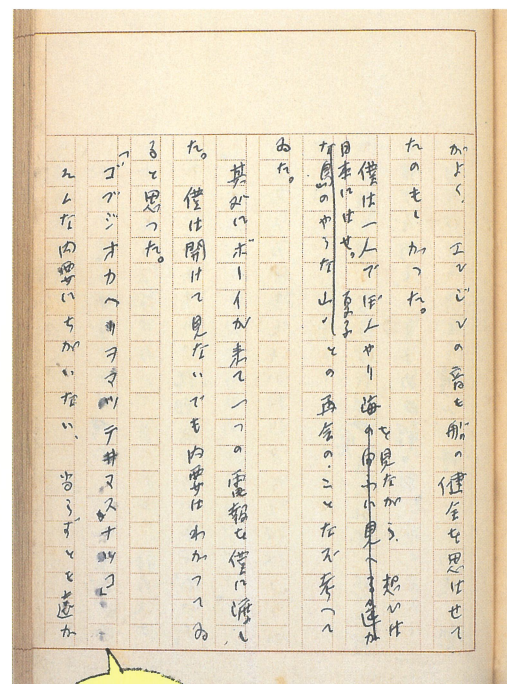
武者小路実篤

愛と死



新潮文庫

今でも手に入る新潮文庫『愛と死』



この
点々とした
シミに注目!

泣きながら書いた
『愛と死』の原稿



作品データ

『愛と死』…昭和14(1939)年7月、実篤54歳のときに発表。

作品を書いた当時は日中戦争の最中で、愛する人を突然失う心境について書きたかったそうです。

宙返りもするような活発な夏子が、インフルエンザの大流行で急死するという設定の小説ですが、むかしは今ほど医学も進んでおらず、死が身近な出来事だったので。

小説を のぞいてみよう!



人生とは、ままならないものだ

人生にはいろいろな喜びが与えられている。しかしその最も大きな喜びの一つに僕は捕虜になった。夏子は今や僕には欠くことの出来ない存在になった。…僕は幸福の絶頂にいた。しかし人生というものは思わぬ時に道がひらけたり、閉じたりするものだ。自分はその時、巴里にいる叔父から巴里に来たらどうかと言われた。僕は前に叔父に一度巴里に行ってみたいと手紙を出したことがあった。僕はもうそれを忘れていた。ところが叔父はどう思ったのか不意に巴里に来て見ないかと言ってきた。僕は今ゆきたくなかった。… (一五章)

愛する人の死をのりこえて

「死んだものは生きている者にも大なる力を持ち得るものだが、生きているものは死んだ者に対してあまりに無力なのを残念に思う。」

今でも夏子の死があまりに気の毒に思えて仕方がないのである。しかし死せるものは生ける者の助けを要するには、あまりに無心で、神の如きものでありすぎるといふ信念が、自分にとってせめてもの慰めになるのである。

それより他仕方がないのではないか。 (三六章)



さあ、『愛と死』を
読んでみませんか？